

8 高等教育機関合同公開講座

「函館学」

後期：函館の食や他地域との交流
第3回

「伝説の誕生

ー北方世界に生きるエネルギーー

講師 北海道教育大学函館校

教授 佐々木 馨

開催日時：平成18年11月18日(土)午後2時～3時30分

開催場所：北海道教育大学函館校

[伝説の誕生—北方世界に生きるエネルギー]

北海道教育大学 佐々木 馨

I はじめに

- ① 「ねぶた」(松木明知、津軽書房、2006年1月) —その起源と呼称
- ② 「執権時頼」(拙著、吉川弘文館、1997年12月) —史実か伝説か
- ③ 「天皇と中世文化」(脇田晴子、吉川弘文館、2003年10月) —天皇
制の存続理由

II 「伝説」の特質 (日本民俗学の祖柳田國男)

- ① 「真実性」 ② 「非定型性」 ③ 「土着性」(昔話や説話との違い)

III 歴史(学)と民俗(学)との接点を求めて(試論)

- 「歴史的伝説」(史実を前提にした伝説世界)
「民話的伝説」(一定の史実を背景にした伝説世界)

IV 「歴史的伝説」の世界

- ① 坂上田村麻呂と円仁(古代東北の仏教界は天台宗が基調)
- ① 執権時頼の東国行脚(鎌倉幕府の「禪密主義」による改宗)
- ② 日蓮宗僧日持の海外布教(「宗門の義経」にみるグローバルな伝説)

V 「民話的伝説」の世界

- ① 荒木大学(知内町の開基)
- ② 宇田師長(乙部町の開基)
- ③ 茂別館の道明風(旧上磯町の開基)

VI 伝説の風土

- ① 近世蝦夷地の開拓と開教(城下寺院と蝦夷三官寺の論理)
- ② 近代北海道の開拓(「宗教殖民論」)

VII 伝説の文化力

- ① 伝説にみる「みちのく」と北海道の同異性
「着夷」=「みちのく」と道南の一体性(「エミシ」呼称)
「脱夷」=律令国家の蝦夷征討と仏教
「転夷」=鎌倉幕府の東国経営と鎌倉新仏教の布教
- ② 開拓と開教による地域創生
- ③ 伝説に地域活性化の「文化力」

26	乳井屋砂門庭	承應2年(1776)	福王等	板上市村赤呂の頼隆で、 承應2年の月刻とも伝 える
27	日照田楽師如果堂	◇	◇	本家は行基菩薩作と伝 える
28	十張内聚世宮	不詳	◇	◇
29	十張内大石大明神	◇	◇	岩木山三所御現を参考 ◇

表2 『津輕一統志』にみる寺院

備考	創立年次	宗派名	寺院名
真言五山寺、初め十原内村にあり 真言五山寺、初め小沢村にあり 初め大連郡黒川村にあり 天正15年(1587)に真言宗に改宗、元和朝開目に復す 親勝院、後宮寺として再興	不詳 不詳、信門智の創立とも不詳、信門智の創立 不詳 不詳 不詳	真言宗 * * 真言宗別行派 *	1 百沢寺 2 同上寺 3 久渡寺 4 大門寺 5 大神宮寺 6 東福院

ある。すなわち、「大聖不動明王」を伝える
此山（古縣山）往者円智上人詣開基三阿達羅
只傳明王何處（後略）と、表1の5の「深沙大
現」を伝える、
当国者中日本良_二之間往古移_一比叡山、而
置_二三千坊_一所、爾阿_二達羅_一三千坊十三、欲千
坊有_二阿達羅_一神一官一寺阿達羅千坊之也云。延
曆年中田村麻呂謂_二東夷征伐之勤而卒_一五
万八千之宮兵_一征_二凶徒_一之時戰不利、依
之所仰_二仏神之威力_一則有_二感応_一此御神現
夜舟形_一、_二遷_一衛將軍麻呂是当社
とを綜合すると、円智上人の建立した寺院は眞
言宗ではなく、天台宗であつたのである。
円智上人の開基と伝える阿達羅の三千坊のこ
とを、右の一文は天台宗の根本道場である比叡
山との関わりで捉え、しかも、その深沙大権現
を坂上田村麻呂に關連づけている。

表1 『津軽一統志』にみる神社

寺 院 名	創立年代(推)	別当(宗派名)	備 考
1 岩木山三所大権現	延暦15年(796)	百沢寺(真言宗) 兼勝院(真言宗)	坂上田村麻呂の事跡 この付近は坂上田村麻呂の所居
2 八幡大神宮	不詳	同上寺(真言宗)	
3 大聖不動明王	内智上人、阿間 龍山を開基	久渡寺(真言宗)	坂上田村麻呂建立の 森山毘沙門堂あり 権門堂の創立とも伝え る
4 聖観音	不詳		
5 深沙大権現	大同2年(807) 坂上田村麻呂	神宮山長命院 神宮寺(天台宗)	元龜4年(1573)の建立 ともいいう
6 雄野三所大所大権現	不詳	泉光山長命院 (天台宗)	
7 八幡大神宮	不詳	那智山役宮寺 (天台宗)	
8 八幡太神宮(後河)	延暦12年(793) 坂上田村麻呂	神教	近衛前所の別当は加堂山 妙正院
9 加茂大明神(後河)	延暦11年(792) 坂上田村麻呂	第九郎	
10 横内妙見堂(常陸)	延暦12年 坂上田村麻呂		
11 藤崎毘沙門天	延暦12年 坂上田村麻呂		
12 森山毘沙門堂	大同2年 坂上田村麻呂		
13 熊野本宮大権現	大同2年 坂上田村麻呂		
14 山王大権現	・	修験 大馬院	
15 今福八幡太神宮	・	修験 広住院	本事は悪心作と伝える
16 渡岡牛頭天王	・	修験 高福大和寺	本事は弘法大師作と伝 える。堂は田村麻呂の 建立とも伝える
17 外ヶ浜十二所権現	・		
18 田舎館大日和如来堂	・		
19 広船千手観音堂	大同2年 坂上田村麻呂		
20 坂庭千手観音堂	不詳		
21 坂庭地主八幡宮	大同2年 坂上田村麻呂	修験 普光院	本事は聖德太子作と伝 える
22 深淵門口観音堂	・		本事は聖德大師作と伝 える
23 深淵薬師堂	・	修験 常福院	
24 赤石毘沙門堂	・	神教	
25 眉崎熊野大権現	不詳 坂上田村麻呂	修験	「往古真言宗寺院遍在 シテ今号「新修館」」

⑤ 日持の名を聞けば、誰しもが日蓮の本弟子・六老僧のひとりで海外伝道者と応えるに相違ない。その日持は、ではどのような経緯から海外弘通に赴いたのであろうか。それを知るためには、略伝を確認しておこう。

甲斐公・蓮華阿闍梨と号した日持が駿河國庵原郡松野の地の松野六郎左衛門の第二子として生まれたのは建長二(一二五〇)年のことである。宗祖日蓮の印可を受けたとされる『持妙法華問答鈔』の著述にその片鱗を窺うように、幼少の頃から和漢の典籍に通じ、文章・和歌にも卓越した才能を発揮していた。長じて十四・五歳の頃、『四十九院申状』が端的に示す如く、近隣の天台宗寺院たる四十九院および岩本実相寺に学び、そこで日興(一二四六・一二三三)に兄弟した。その日興を介して日蓮に深く帰依したのは文永七(一二七〇)年のことであつた。以後、佐渡・身延の日蓮に従随する一方、日興と共に「熱原法難」を忍受しつつ郷里駿河地方に師説を弘めていった。弘安三(一二八〇)年には、実家松野氏の外護を受けて生地に堂宇を営み、蓮永寺の前身である永構寺の寺基を定めた。師日蓮の入滅に際しては、六老僧のひとりに列し、滅後においては本応院に抛りながら、五月と定められた身延の輪番を勤仕した。そして、日蓮の七回忌に当たる正応元(二八八)年六月八日、侍従公日淨とともに「蓮華阿闍梨日持(花押)」と願主名を刻んだ祖師の坐像を池上本門寺に安置したのである。実は、この正応元年の胎背銘こそが日持の足跡を窺う最も後の史料であり、その後の軌跡を察知する客観的な遺物・史料は存しない。

⑥ 日興とは日蓮の『本化別頭公祖統記』によれば、京都生まれの「本満寺板首之僧」で、日持ゆかりの法華塔を大永元年に松前に移した松前法華寺の中興者という人物である。この日興について注意すべきは、渡道の経緯を伝える次の二つの史料である。

①「京都本満寺ノ僧久遠院日尊、日持尊者弘通ノ偉蹟ヲ追慕シ奥羽二州ヲ弘通、暫ク津輕ニ滞錫シ一寺ヲ建立シ後蝦夷地ニ渡リ日持尊者ノ遺蹟ヲ尋子、上ノ國小畑ニ尊者弘通ノ蹟ニテ一字一石ノ埋メアルヲ感得ス」
②「日尊者嘗而洛陽本國寺之為衆徒。聊ヲ披撰出、為補其容、繫於松前、建法花寺。其後經三歲霜、而開当寺(淨慈建立寺)於賀田村、次建於羽州秋田久成、伝法、法花之三寺、以其功、傳本寺之勳。」

すなわち、①にみる如く日尊は鎌倉時代の日持をよなく追慕して渡道したのであるとともに、②の如く日尊自身、本寺の本満寺において何がしかの咎を犯してその償いをせざるを得ない弱い立場に置かれていたのである。言葉をかえていえば、日尊の渡道時の心境は教団に負い目を感ずる弱い敗者のそれであつたのである。この日尊の内なる敗者の心情は、奥州・蝦夷地の布教を通して、いつしか己れ自身を鎌倉時代の日持、「疎外に泣く孤独の日持」を重ねて行つたと推測される。日尊による日持への自己投影は同時に、「文治五年己酉源廷尉義経進・高館之乱来于是地、永仁三年乙未吾蓮華阿闍梨日持尊者教・済興域・教・化夷狄・晩到于賀島」から明らかな如く、日持の渡道を源義経の島渡り伝説に敗走伝承に結びつける営みでもあつた。つまり、日尊の眼には日持の渡道が宗門の義経の営為として映じ、そこには敗走者に個有な判官贔屓の思いが存したのである。

⑦ そうしたなか、日持伝記編纂史の上でその質量の両面において画期的な伝記が編まれることとなつた。享保十六(一七三二)年の日蓮の『本化別頭公祖統記』において、六門まず日持の出生から筆をおこした日潮は、修学の様子、日興・日蓮との邂逅の経緯、『持妙法華問答鈔』の印可、六門弟としての身延輪番の勤仕など、現代に伝わる日持伝の骨組を大筋的に示した上で、次の如く、異國布教への旅立

ちを名文にのせて綴つた。
「本朝ノ弘經有昭朗等諸奇ニ而足矣、我往異域、聞揚妙法、假使海中遭颶風大魚之難、是我至願也矣。永仁二年甲午高祖十三回諱九月十三日松野修二大法会、十月十三日諱・身延山・唐拜・祖塔・翌三年乙未正月朔日(中略)付法日教・孤身絕俗、錫而出門人欲隨之、師曰我教・済興國・奉・身命仏祖・設葬・於江原之腹中、我何辭之乎。弗・爾所・奉行若皇一毫之浮心、我願不成就、衣而去門人泣而別。遂趣・異域、不知終處(後略)」と。日潮はこのように日持の異國布教への前途をヴィイゾに描き上げ、伝記としては読む人を魅了して離さない程の筆致を示したのである。ここに至つて、日持は完全に筋の通つた異國弘法者として誕生されたと言つても過言ではない。前引した如く、日潮はこの『仏祖統記』の中で「源廷尉義経進・高館之乱来于是地(松前)初而闢之、永仁三年乙未吾蓮華阿闍梨日持尊者教・済興域・教・化夷狄・晩到于賀島」と、日持を「宗門の義経」に擬えてもいたことを併せ考えれば、日潮によつて日持は、新天地を力強く拓く勇敢な伝道者として伝記的に創造されたと解してもいい。この段に及んで日持はかつて室町期の日尊が思慕した同僚の中に活きるが如く、「宗門の義経」でもなければ「疎外に泣く孤独の日持」でもない。海外に孤身堂々と布教に赴く強い日持と姿容したのである。

近世においては、日持の遺跡がもつばら朝鮮・中国に求められていたのが、大正初年までの近代においては樺太方面に求められるに至ったのである。このことは対外関係の推移とともに、日持遺跡の調査も変移していることを意味し興味深い。日持は海外進出における宗門上の先導的役割を演じている、否、演じるように遺跡・評伝の中に活かされているとみて間違いないだろう。このことを最も如実に示したひとりに三上義徹を挙げることができよう。彼はその著『国士日持上人』の中で、日持の奥州・蝦夷地弘通をその遺跡のなかに自ら確信した上で、「思想問題を排けて西比利大陸に進み、精神的世襲統一の大義を獅子吼せられた人は、日本国民中日持上人の外には一人も居ない」と高くらかに顕彰する。三上は日持を「西比利の地に陥み入って、世界統一の第一歩として精神的教導に尽された」高僧とも言う。三上のこの著が大正八（一九一九）年に刊行されていたことを併せて考えれば、シベリア問題に燃発された彼が、日持をその地の精神的教導者・帝國主義のバイオニアとして創出したことは、これまでの日持伝の推移からみて至極当然のことであつたと言える。

やがて大正後半、昭和初年に及んで、所謂近代日蓮主義者による精神的統一が盛んに叫ばれて行く。例えば、「日持師の外国伝道の如きは、大和民族としての海外宣伝の権与であるとする北尾日大は、大正十年、「同胞よ先づ自己の思想の根柢を改造して、我真正なる日蓮主義に帰せよ」と呼びかけたし、「従来の如き迷途なる仏教の応用を改めて、人生の現実に役立つ所の活き／＼したる宗教として仏教の応用を試みなければならない」との立場をとった本多日生は、昭和四年、「法華経並に阿含経」を面細亜の光とし、之を世界の光として人類に与へなければならぬその責任を帯びて奮闘するものが所謂法華の徒であるべきである」と絶叫した。昭和六年、「偉人（日蓮）の靈光世界無比の國体を有する日本帝國と冥合して、世界の全土に輝くに到らん（中略）立正門下の諸士奮起せよ」と宗門の決起を誘った笹川日堂もその同列である。

⑨ 函館における都市型布教の展開の第一頁は、「函館臥牛山の日持尊者真蹟の硃石も、内務訓令に基き古跡保存の内命函館区長に有之」に確認されるように、函館区が日持の硃石保存を決定したことに始まる。それは、旭川（二九六）一月、日蓮の高弟の日持が異域布教を目指して蝦夷地に渡航し、函館山頭の鸞冠形の巖石に「南無妙法蓮華経」の七字を刻したとされる靈跡のことである。

この硃石は、函館区古跡保存を受けたのち、明治三年、函館砲台要築築城部より移転を命ぜられ、船見町山の上に移動した。それが、明治四年の頃には、実行寺の住職望月日謙によって、箱館戦争にちなむ旧幕府軍の戦死者を慰霊する碧血碑とともに、宗門の内外に喧伝されるに至る。言うなれば、明治四年前後には、実行寺一日持の硃石・碧血碑が、三位一体となって、函館はもろろのこと、北海道の仏教伝通史の中に自己主張し始めたのである。望月日謙は、明治四年の皇太子の北海道巡啓の際に、この碧血碑と日持の硃石が「御意にとどまり給ふ」ことに大いなる期待を寄せていた。ここに、日蓮宗と近代天皇制との尋常ならざる結びつきを観察することは、そう困難なことではない。

ともあれ、明治末年の頃には、日持に関する函館区民の関心も高まり始め、大正年間には、例えば、「年々日持の例祭に参拝者の多くなったのハ漸く上人の偉蹟が世人に知られたため」と受けとめられるようになった。こうした函館における日持に象徴される都市型布教の営みは、宗門の周縁部にも飛び火し、「亀田郡石崎妙応寺に於ては十八、十九日の両日、函館実行寺山主の臨修を讀み敬慕なる報恩法要を営む」と、石崎妙応寺においても、日持の例祭が実行寺の主導で施行されるに至った。日持を追慕する念は、年とともに深まり、他宗教・他宗派に全くみられない個人信仰が函館とその周縁部において定着する。大正一〇年（一九二一）の頃には、新聞記事も、六月一日をもって「日持上人の上陸記念の日」と報ずるまでになっていた。大正期は、大正三年の第一次世界大戦の開戦と日本の参戦および大正七年のシベリア出兵にみられるように、対外的には海外進出に彩られた時期である。この海外進出、軍事進攻の時代思潮を背景にして、海外伝道の先駆者たる日持は、舌施せし民衆を驚か

それは表現をかえていえば、当該期の函館区民や日蓮宗門の信徒たちは、海外伝道者の日持を通して、近代天皇制の海外進出熱を画策していったのであるし、この画策によって近代の日持伝が形成されていったといえるのである。この個人的で特異ともいえる日持伝の近代的伝説を助長したのが函館の思想界であるとするなら、これ自体、函館の歴史における一大特質とみなして大過ないだろう。

このように、日持伝の近代的部分は、函館を思想土壌にして助長・形成されたと思われるが、この日持伝の形成において、いま一つ看過してならないのが、函館を基地とした北洋漁業の操業である。北洋漁業をひとつの媒体として、日持伝の近代的伝説が形象化されていったからである。すなわち、大正二年九月二日付の「函館毎日新聞」は、「日持上人の遺跡露領に於て発見」という見出しで次のような日持関係の記事を報じたのである。すなわち、西比利亜^{シベリヤ}管内の黒龍江付近に日持上人の遺跡探検にきた樺太大泊の日宗寺住職花木即忠が、黒龍江外の外ボロシク第二九号函館第三洋組鑑詰部の主任中里寿郎に面談し、その中里から日持上人の遺跡らしきものがこの付近にあることを聞き出した、というのである。

思うに、この北洋漁業で黒龍江に向向していた中里の情報提供がひとつの契機となつて、これ以後、日持の近代的伝説はより一層、史実化するようになり、それが大正七年のシベリア出兵に及んで、日持「海外伝道者のイメージ」が定着することを考えれば、日持伝の近代的部分に占める北洋漁業の存在はかなり大きいものではなからうか。

このように、日持伝は、函館における都市型布教の中で近代の史伝を内実化していったのであるが、これはひとり日蓮宗門だけの問題ではない。これは、広く函館宗教界全体ないしは函館区の問題でもあったことは、さきの記事からもわかるう。この函館と日持との宗教的関わりは、昭和期に入ると、なお一層緊密なものになる(後述)。

明治大正期において、すでに日持伝説と日蓮宗実行寺との表裏二体的な結びつきは確認されていたが、そうした前提を踏まえつつ、函館の昭和仏教史は、なお一層、日蓮宗に色濃く染められることになる。その契機をなしたのは、ひとつに、昭和十一年に弘安海なる宗教団体が碧血碑前に牛の像と四万円相当の五重塔を寄進したこと(註1)が挙げられる。函館市ではその翌年の六月二〇日、市主催の第一回碧血碑慰霊祭を、市長・収入役・函館要寮司令官以下一〇〇余名の出席で挙行政した。日中戦争の前後に、日蓮宗寺院の実行寺が管理する碧血碑祭が市の主催で執行された意味は少なからず大きい。明治八年(一八七五)に碑が建立されて以来、碧血会なる篤志家たちによつて祀られてきたこの祭りが、昭和十一年に市の主催となつたことが、再び引き金となり、その六年後の昭和十八年には「碧血碑を市に移管しよう」という動きが活発化することとなつた。

函館市と碧血会が祭祀執行によつて歩み寄りをみせると、勢い従前の実行寺に伝承される日持伝説もいやが上でも世間の注目するところとなる。「日持上人霊場大法要を厳修」の新聞報道はまさにそれである。この中で「日蓮の高弟・海外布教の先駆者日持に因んだ霊場」での大法要は、津軽要寮司令官の崇敬に依るものであるとも伝えている。従前の日持伝説の伝承顕彰の主体はもっぱら、実行寺を中心とした日蓮宗寺院であつたことを考えれば、この昭和十〇年代に入り、その伝承媒体が拡大されたことになる。ここに至つては、日持に対する関心が高まることは必定で、昭和十一年四月には「北方開発の傑僧日持聖人の銅像」が市内の中学校教師により実行寺に寄付されることとなり、衆目の関心事となつた。

このように、日蓮宗が函館仏教界において、碧血碑祭や日持伝承を通して、自己宣伝していったことは、さきの要寮司令官との関わり方から考えても、その「体制宗教」としての使命をより一段と強固にさせたことを意味する。

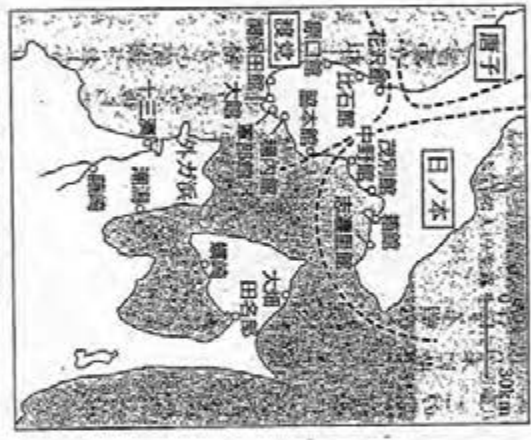
の根にも金が鈴の如くに付いている。またその金の元なるゆえに通元という名前が付いたという。

大学はじめ家中、堀子は残らず上陸し、毛なし嶽を居城としたが、今の荒神堂の位がその場所である。この毛なし嶽で凡そ三年建保五(一二七)年まで金堀を行い、それより出石丸山の裾野、赤瀬の位、左は大川、右は深沢で、飛鳥も登れないような所を見立て築城し、ここに荒木外記を残したのでその場所を古来から外記の山と称している。大学は家老尾吉衛門に堀子を付して赤瀬坂方面を掘らせた。赤瀬坂の地名は五月雨が降り続き作業が出来ず、堀子が事を打って日を送ったことからその名が付された。また目付として多作が来ていたので、よし堀のことを多作の堀といっている。

大学は出石丸山の城の近くに菩提寺を建立し諸木万草を庭に置き四季を楽しんだが、とりわけ方敷十間、径二丈、九尺、六尺等の藤の大木があり、藤の花は紫の雲の如く華麗で人々を驚かせ、寺名を真藤寺と名付けた。その跡や藤の木の名残りを今も留めている。また不思議なことはこの真藤寺の近くでときに鐘の音を聴き諸人は大いに驚いた。また土蔵のような形のものがよく見えたという。この寺の場所はチリチリ川と真藤寺山のところにあり、また大学の城郭跡は、一帯が大学の山と呼んだ所の西の方に当り、今もその跡が残されている。ここは昔から松の大木等が残り出された所であるが、今小松の茂る物淋しい霊山になっている。

大学が城郭を構えてから三年余を経た頃、山々震動し人心が動揺したので、大学は一つには天下太平、二つには当所安全のため二社を建立、寛元二(一二四四)年六月二十日大野了徳院をして賀茂の両社の祭祀を行わせた。今は一社にて惣尊電公神社であるが、これによって震動も止み堀子共は安堵した。

館名	所在地	主
志摩里館	新館市志摩町	小林太政左衛門尉良景
物館	新館市同館山麓	河野加賀守右衛門尉政通
茂岡館	上磯町茂岡地	下国安東式部大輔家政
中野館	木古内町字中野	佐藤三郎左衛門尉季則
鹿本館	知内町字鶴元	南条治部少輔季雄
鹿内館	福島町字吉岡	菅土甲斐守季直
鹿館	松前町字東山	今泉利部少輔季友
大館	松前町字西館	下国山崎守政雄
福保田館	松前町字館浜	近藤四郎右衛門尉季常
原口館	松前町字原口	國政六郎左衛門尉季道
比石館	上ノ国町字石崎	厚谷左近将監重政
花沢館	上ノ国町字上ノ国	鶴崎将運太夫季榮



通南十二館の位置と東北地方地図

柳山に安置し奉る本尊如來觀音自在菩薩の由来を尋ねるに、人皇七十代、後冷泉院御宇天喜五年庚辰品部
川(河川か)次郎太安倍貞任、鳴海新三郎、安倍宗任陣中の守本尊にして尊敬浅からざりしが時なる哉や八幡
太郎義家公の為に貞任は討れ宗任は降参し數度の合戦を経て出羽の國に住せしが其苗裔三百余年の後下國安東太
郎盛季に伝ひ奉る(嘉吉か)三年此尊像を守護して修験永壽坊道明と共に船に打乗りて此國に至らん事を欲す折
しも、十二月十日暴風雪を亂し送渡天を渡するれども念彼觀音力波瀾不能の誓い空しからずして海上漂なく東在
茂辺地に著岸し爰に忘ばらく年を送りける。是下國氏代々の始祖也夫より上の國下の國の兩所に岩をかまえ夷
服を平均し、終に世治まりて後松前に至り一字を建立して福聚山慈願寺と云う。(後略)

松前福聚山慈願寺 沙門孝順
右桑文吟味役 木原半兵衛
下役 鹿崎八郎右衛門

八幡神社の起原は乙部村の起原なり。記録の存する所によれば、往昔、本州南部地方より上杉謙信の家
臣宇田遠江守師長、河中島の戦より落延び、從者近藤市兵衛、其弟五郎兵衛及福原利右エ門の三名を引率
し、小船に乗り渡島に來りたり。

折しも、風雨激浪のため、九死に一生を得て、奥尻島に着したるが、人家なく、東方を望むに、高山連
るを見て、之蝦夷地の大陸ならんと勇を鼓し、更に順風に乘じ出帆、久遠郡太田崎に着したり。

然るに、此処にも人家を見る能はず、糧食全く尽に至り、救を求め、海岸に沿ひて西方に下る。時恰も、
暗夜にして、更に人烟を見ず。下る程に、乙部村短川岸に至りたるに、西南方に當る山(岡山)の中央に
一点の光輝の発するを認め、之人家のあるならんと欲びて、近づき見るに、不思議哉、光輝は燈火にあら
ず、一本の老月桂樹の木梢より一種の光輝の発するものと判明し、一同落胆す。

茲に、師長は神に祈願し、神宣(みくじ)を以て、人家所在の方向を得、西南指して探査したるに、果
せる哉、土人の住家を發見したり。之今の洞内なり。四人は蘇生の思ひをなし、土人に請ふも言語通ぜ
ず、漸く手真似によりて、意思想を通じ、食を求めて餓死より救はるゝを得たり。

師長、神徳の尊さに感激し、身は武士なりしにより、八幡大神を、右光輝を亮したる月桂樹の根の下に
塚を建て、祭り、遂に、此地に住するに至れり。

之頃、本社創始にして、之より和人次々、住すに至る。後に人家、増加するに及び慶長六年に社殿
を作り、岡山八幡宮と稱して、創立を見るに至る。

彼等ハ矢張其儘勝手次第ニ為致差置、若彼等本邦葬埋之風を慕ひ相願候者も御座候ハハ、是又制止候
眼ニ者無御座、其意ニ任せ候心得三程在候
(休明光記)

西蝦夷地之内江捕備共自力を以庵室一字宛取結弘法作善相客、天下泰平、国土安穩之祈願専ら相勤、
且者御法度之切支丹宗門等勿論相改、常々夷人ニ至返勸善懲惡之教諭仕度奉存候(中略)檀家之者江渡
夫々申論田畑開闢者不及申、樹木植立等三至返丹誠為致度、又者山道險阻之場所ニ者石像等亦安置為致、
左候得者有信之者共自今迄致し未々村落ニ至相成候半々、自然御開闢之趣意ニ及相叶。

これは、松前城下の法源寺と龍雲院が、江差の正覚院によびかけ、連名で箱館奉行所へ提出した願書
の一節である。ときに安政四年(一八五七)。

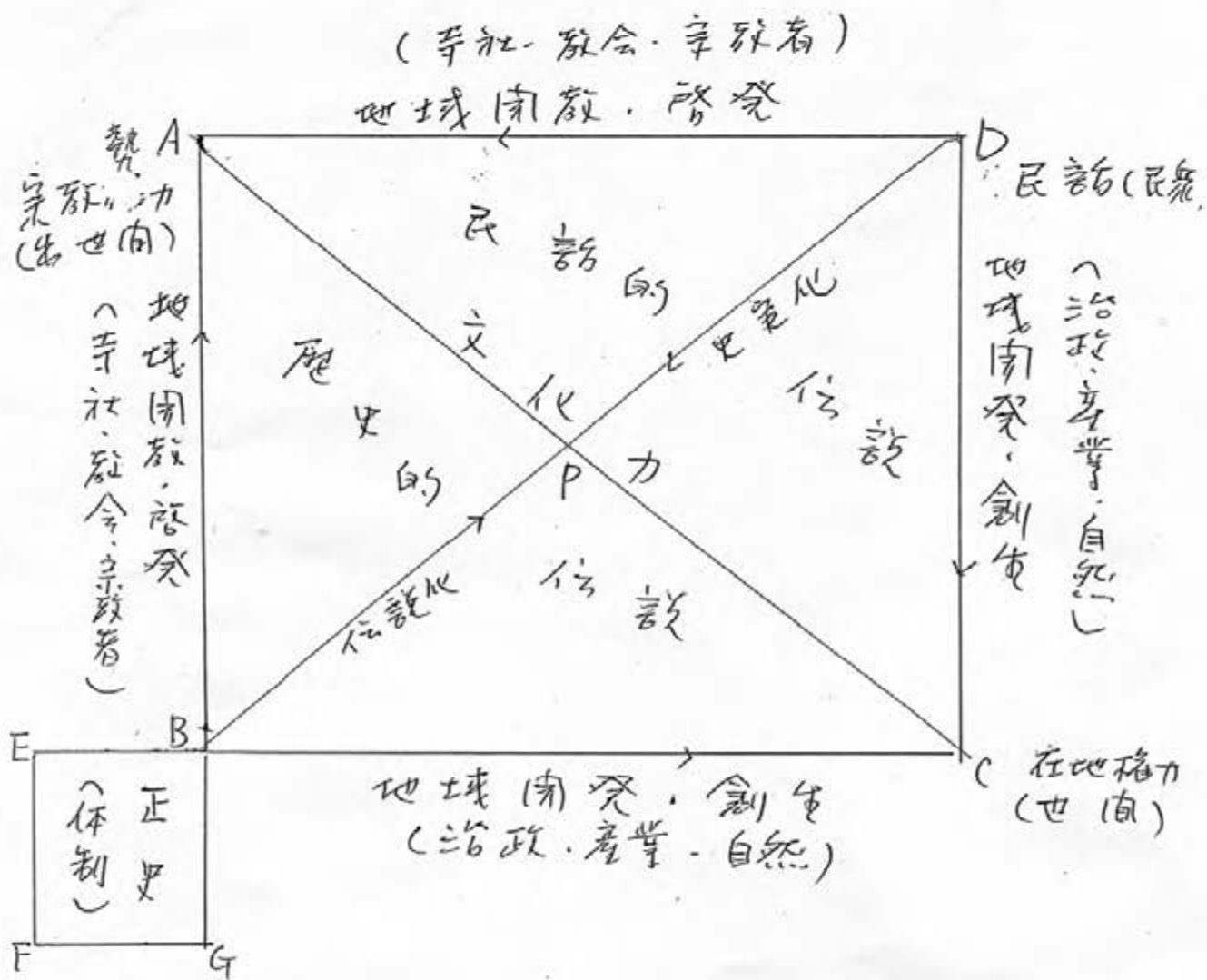
17

16

15

14

20D



< 伝説の基本構図Ⅰ >

〔伝説の内容〕

1. アイヌ関係	25件	10. 長円寺の沈鐘	(青 森)
2. 源 義経	(北海道) 9件	// 森農場	(北海道)
3. 坂上田村麻呂	(岩手・青森) 5件	// 立 山	(富 山)
4. 日 持	(北海道) 3件	// 網 走 (地名)	(北海道)
5. 小野小町	(秋 田) 2件	// 黄金沢	(北海道)
6. 羽 衣	(北海道) 2件	// 田沢湖	(秋 田)
7. なまはげ	(秋 田) 2件	// イタヤの木	(北海道)
8. 不來方	(岩 手) 2件	// 石割桜	(岩 手)
9. 十和田湖	(青森・秋田) 2件	// 定山溪の河童	(北海道)
10. 鬼子母神	(北海道) 以下1件	// おいらん淵	(北海道)
// お行塚	(福 島)	// 恋 沼	(北海道)
// おしらさま	(岩 手)	// 栗の木	(北海道)
// 忌部氏	(香 川)	// 浦島神社	(京 都)
// お鶴明神	(宮 城)	// 日 光	(栃 木)
// 開拓と牛太郎	(北海道)	// 赤目の行者滝	
// 騎馬参拝	(北海道)	// 雷電為右衛門	(長 野)
// 岩見沢 (地名)	(北海道)	// 佐々成政	(富 山)
// 大蛇神社	(北海道)	// 八 郎	(青 森)
// 道後温泉	(愛 媛)	// ケラー [札幌ビール]	(北海道)
// ヤスの滝	(秋 田)	// 本多正純	(秋 田)
// 小川原湖	(青 森)	// 弘法大師	(愛 媛)
// 弁天島	(宮 城)	// 芳子の墓	(北海道)
// 駒ヶ岳	(北海道)	// 東北のキリスト	(青 森)
// バンザイ峠	(北海道)		

20

「伝説」観Ⅰ 「伝説」観に変化なし

「伝説」観の内容	人数
1. その土地の人びとの想い	4
2. 古来の賢い考えの想い	2
3. 現実っぽい作り話	2
4. 夢とロマンを与える	1
5. 帰属意識から生まれたもの	1
6. 昔からの言い伝え	1
7. 地球文化の存在の糧	1
8. 地域を治める手段	1
9. 悲劇のヒロインは死後に美化	1
10. 偉人のすごさを伝え残す	1
11. 先人の教訓	1
合 計	16

(21)

「伝説」観Ⅱ 「伝説」観に変化あり

調査以前の「伝説」観	調査以後の「伝説」観	人数
1. 想像上の話	・地域に生きる本当の話	15
2. 伝説について考えたことはない	・地域にとって意味のあることを →知った	14
3. 非現実的な言い伝えや噂	・地域の文化に影響するもの	10
4. 地域のおとぎ話	・地域の文化を反映するもの	7
5. 地域に伝わる物語	・地域の歴史を反映した物語	7
6. 昔のすごい出来事	・先人からの現代人へのメッセージ	4
7. 空想の物語	・真実の言い伝え	3
8. リアリティのないもの	・夢や教訓	3
9. おとぎ話	・後世への希望・信仰	2
10. 非現実的な遠い存在	・身近な存在	2
11. 地域の壮大な話	・地域を知る資料	2
12. 恐ろしいイメージ	・身近な世界	1
13. 得体の知れないもの	・地域で共有するもの	1
14. 時間とともに変化していくもの	・地域の願いや思い	1
15. 地域を説明する手段	・地域に生きる手段	1
16. 有名人の話	・身近な話	1
17. 昔の堅苦しい話	・事実の基づく楽しい世界	1
合	計	74

no F

宗教殖民策ハ北海道開拓ニ必要ニシテ、實ニ今日ノ急務ナリトス。彼ノ移民タルモノ、多少進取ノ企アルヲ以テ、業務上遭遇スル失望ト失敗トヲ感スル度ヲ減シ、此企圖ヲ阻喪セシメ、徐ロニ成功ヲ期セシムルハ、宗教ノ力能ク爲ス所ト雖モ、拓地殖民ハ國家的ノ事業ニシテ、其目的、國民利福ヲ企圖スルニ他ナラス。故ニ我北門ノ鎖鑰タル北海道拓地殖民ハ、天府ノ金庫タル其實ヲ舉クルニ止ムラス。兼テ邊防ノ一端ヲナス者ナレバ、其宗教ハ國家ナル感念ヲ信者ニ與ウルニ非サレバ、最モ不可ナリ。且ツ當道殖民ハ、眞個ニ國防上ノ關係アルモノナレバ、護國ノ精神ヲ涵養スルノ宗教ナラサルヲ得ス。吾人ハ以上ノ性質ヲ具ウル宗教ニシテ、信

仲心ヲ堅固ニシ、移民ノ感情ヲ傷ハサルモノナラシメ、其宗教ノ耶蘇教タリ。回々教タリ。佛教タルハ、問フ所ニアラスト雖モ、若シ吾人カ謂フ所ノ要素ヲ具備セサル宗教ナラシムルカ、假令熱心ニ宗教殖民策ノ必要ヲ論スルモ、決シテ賛成スル能ハス。又希望スル所ニアラス。然ラバ、移民ヲシテ護國ノ精神ヲ發揚振起シ、以テ敵愾心ヲ旺盛ナラシムルノ宗教ハ、

思フニ佛教ニ如クモ、ノナカルヘシ。移民感情ヲ傷ハス之ヘカ信仰ヲ厚シ、一致團結事ニ耐ヘシムルモノハ、佛教ニ及ブモノナカルヘシ。實ニ我農民等ハ、佛教以外ノ宗教ハ之ヘナ。邪宗視シ、此感念ハ現時ノ農民ニ遺傳深染シテ、未タ脱セサルモノナレバ、佛教ヲ以テ彼等ヲ統御スルハ、事實上最上最好方便ナリ。否、道理上ヨリ推論スルモ、吾人ハ現世界ニ存スル宗教中、最高等ノモノト信スルモノナリ。或醫學博士ハ、神經衰弱症ヲ豫防スルニ佛教ヲ以テ精神ヲ鍛鍊スル必要ヲ實驗上ヨリ論セシ。如ク吾人モ、拓地殖民ニ佛教ノ必要ナルヲ認ムルモノナリ。而シテ佛教ハ

細

カアラフ佛者ハ自己カ信奉スル宗旨ニ從ヒ國家百年ノ爲ニ自己カ教徒ノ窮民ヲ移植シ我富源ナル北海道ヲ開拓スルハ護法護國ノ精神ニ適フモノニアラス然ラハ教徒ヲ救済シ一ニハ國家ノ富強ヲ企圖スル有識ノ士ト共ニ大ニ奮發シ慈善ノ趣意ニ基キ殖民費ヲ募集シ或ハ布教費ノ一部ヲ割キテ北海道拓殖民ヲ計畫獎勵セハ吾人ノ信スル所ノ成算ヲ得ルヤ敢テ難キニアラサルベシ而シテ其成績ヲ世上ニ廣告セシハ假令人情ハ故卿ヲ去リ新主ニ轉スルヲ厭フト雖モ利益ノ故卿ニ幾倍シ安樂ノ生活ヲ得ルノ事實アラシカ祖先墳墓ノ地ト雖モ猶敬履ヲ捨ルヲ如ク接武シテ移住スルニ至ルベシ此ニ於テカ北海道ノ開拓振起シ我富源ノ實擧リ眞ニ我日本ノ金庫タル名稱ヲシテ空シカラシメサルヲ得ヘキ也

吉川弘文館

細

多年我國ニ於テ信奉セラレ古來ヨリ我國ノ進歩ヲ扶助促進シタルハ歴史上著明ナル事實ナリ嶮ヲ夷シテ道ヲ通シ河ニ架スルニ橋ヲ以テシ或ハ深山幽谷ヲ跋涉シ清泉又ハ鑛泉ヲ發見シテ飲料若クハ醫療ノ便ヲ與ヘ或ハ諸種ノ植物ヲ栽培調理シテ食料トナスカ如キ布教濟度ト共ニ我國民ノ幸福ヲ指導シテ怠ラス俚俗ノ所謂ル解ラヌ事ハ和尚ニ問ヘトハ往昔佛者カ我國民ヲ先導指導シテ怠ラサリシヲ證明スルニ足ルベシ此ノ如ク佛教ト我國民トハ親密ノ關係ヲ有シ一ニハ祖先傳來佛恩ニ浴スル小民等ハ佛教ノ他又宗教ナキナリサラハ宗教殖民策ヲ計畫セントセハ佛教ニ依ラサルヲ得ヌ又佛者モ其先覺者等ハ粉骨殫身シテ我國民ヲ今日ノ文明ニ誘導シ國利民福ヲ興起シタル偉績世人ノ沿テ知ル所ニシテ全國至ル處我人民ハ佛教徒ニ非サルナシ然ルニ今ヤ教徒ハ衣食住ニ窮スルニ方テ之レハ救済ノ任ニ當リ慈悲ヲ施シテ恒産アル良民タラシムルモノハ佛者ニアラスシテ誰

No 5